

心の理論発達と親の愛着スタイルの関連性

久崎孝浩

The relationship between the development of theory of mind and parental attachment

Takahiro Hisazaki

本研究は、子どもの心の理論発達レベルと母親の愛着スタイルとの関連性について検討した。4～6歳の子どもはWellman & Liu (2004)の一連の心の理論課題に取り組み、その子どもの母親は愛着スタイルに関する質問項目に自己評定で回答した。その結果、自分自身の愛着恐れ型の側面を高く評定した母親の子どもほどパスした心の理論課題の数が少なく、愛着恐れ型の側面を高く評定した母親との相互作用は子どもの心の理解の発達に阻害的な影響を及ぼす可能性が示唆された。養育者の愛着スタイルが子どもとのどのような相互作用を通じて子どもの心の理解の発達に促進的あるいは阻害的影響を及ぼすのかという、その影響経路を今後明らかにすべきであることが問われた。

キーワード：心の理論、幼児期、愛着スタイル、養育者との関係性

心の理論の個人差を生み出す発達プロセス

私たちは日頃、他者との関係を形成・維持していく上で、他者の心に共感することを重視していることは間違いがない。しかし、加齢とともに個々に対人的状況が広がることで、置かれる状況や心の状態を個人間で異にすることも増えていく。それゆえ、他者の心の状態が自己自身と異なる場合もあることを理解していくことも対人関係を維持していく上で重要になってくる。“心の理論(theory of mind)”という枠組みで測定される誤信念課題(Baron-Cohen, Leslie, & Frith, 1985; Wimmer & Perner, 1983)や、他者と自己自身の好み不一致な状況で他者の好みを推測する課題(Repacholi & Gopnik, 1997)などはまさに、他者と自己自身の心の状態の異同に対する子どもの理解をみるべきものとして考案・提示されてきた。そして近年、子どもはどの年齢段階から心のどの側面の自他相違を理解するようになるのかという心の理論の発達プロセスが明らかにされつつある。

また、心の理論発達がどのような要因によって促進されるのかという個人差の発達に関する問題も注目されるようになり、様々なアプローチがされている。その先駆的研究が、Fonagy, Redfern, & Charman (1997) や Meins, Fernyhough,

Russell, & Clark-Carter (1998)の研究であった。彼らの研究は、子どもの愛着の安定性がその子どもの心の理論課題の成績の良さに関連したり予測したりするというもので、養育者との安定した愛着経験が他者の主観的な信念の理解を促す可能性を示唆するとともに、心の理論発達が養育者との関係性あるいはそれを反映する子ども側の愛着に規定されるという風潮を生み出した。しかし、一部の研究(Ontai & Thompson, 2002; Symons & Clark, 2000)で、乳児期の愛着の安定性が幼児期の心の理論課題の成績の良さを予測しないことも示されており、子どもの愛着の質そのもののみを心の理論発達の直接的な規定因として解釈しないほうがよいだろう。確かに、愛着の安定した子どもは養育者との豊かな愛着経験ゆえに相対的に自己自身と他者の視点を混同せずに他者の主観的な心の状態を推測しやすくなるということも考えられる(Fonagy, Gergely, Jurist, & Target, 2002)が、養育者との愛着経験を含む相互的なやりとりの中にある幾つかの要素が子どもの心の理論発達を促していることも想定しておくべきなのであろう。

こうした養育環境論を是として論を進めるには、他の影響についても触れておく必要がある。特に

心の理論課題の多くが、主人公たる他者の状況を言語的に説明した上で質問が子どもに提示されるものであり、課題に取り組む子どもにおいては言語能力の発達を要するし、遺伝的にある程度規定された言語能力が心の理論発達を促している可能性も否めない。その点について、Hughes, Jaffee, Happé, Taylor, Caspi, & Moffitt (2005) は双生児を対象とした行動遺伝学的研究により、心の理論と言語能力の双方に影響するのは遺伝的要因と共有環境であるが、心の理論のみに影響を及ぼすのは共有環境と非共有環境で、遺伝的要因の影響がないことを示した。この研究は、言語能力を含まない純然たる、他者の主観的な心の理解の発達が遺伝的要因の影響下でない可能性を示したという意味で興味深い。ただ、養育者とのやりとりといった共有環境以外に、非共有環境、すなわち家庭外での他者との関係ややりとりが心の理論発達に影響することにも留意しておかなくてはならない。それを念頭に置きつつ、養育者との関係ややりとりが子どもの心の理論発達に及ぼす影響について、近年の研究動向を踏まえながら次に詳述する。

心の理論の個人差にかかわる養育者の要因

子どもの愛着形成と心の理論発達の双方に影響を及ぼしうる養育者とのやりとりの中にある要素とは何であろうか。例えば、Fonagy et al. (2002) によれば、愛着の安定した子どもの養育者は過去に自分自身が感受性の高い応答的な関わりを受けており、そうした経験を通じて、自分自身や他者の行動からその心的状態を自然と解釈することを可能にする“内省機能 (reflective function)”を備えているだろうという。そして、その内省機能の高い養育者は自分の子どもとの相互作用において“明示的な感情鏡映 (marked affect-mirroring)”，すなわち、子どもの状態を随伴的に読み取って知覚的に誇張された形で子どもに応答し、子どもはその養育者の応答を通じて自己自身の心的状態を意識的に覚知することができ、またそれを準拠枠として他者の心的状態をも理解していくようになるという。彼らは特に、愛着安定型の子どもも無秩序型の子どもも他者の心の状態に対する感受性や理解を同様に発達させるが、安定型の子どもは自己自身の表象と関連づけ

て他者の心の理解を発達させるものの、一方の無秩序型の子どもは自己自身の表象に基づいて他者の心の理解を発達させることはないとしている¹。その両者の違いについて、安定型の子どもでは自己自身の心的状態を意識的に覚知するための二次的表象を発達させる養育者の的確な感情鏡映があったのに対し、無秩序型の子どもではそのような感情鏡映を含むやりとりがなかったことを反映しているのだという。このように彼らは、子どもの安定した愛着の形成のみならず、適切な“心理化 (mentalizing)”の発達において、養育者の感情鏡映やその背景にある内省機能を重くみているのである。

また、Meins (1997) や遠藤 (1998) は、愛着の安定した子どもの養育者が“心を気づかう傾向 (mind-mindedness)”を有していることに着目している。心を気づかう傾向とは、発達早期から子どもの行動を心的に解釈し、発話のなかで子どもに心的言葉を多く付与する傾向のことである。Meins (1997) によれば、その傾向の高い養育者は、発達の早い段階から子どもとの相互作用において様々な心的言葉を織り交ぜ、それは結果的に子どもの様々な心的概念の獲得を促すことになるという。また、心を気づかう傾向の高い養育者は子どもの様々なシグナルに対して敏感に読み取り、交互的で洗練された相互作用だけでなく、第3の対象を挟んだ共同注意を基盤とする相互作用をも展開することができ、最終的にそうした相互作用の経験は子どもに、現実には1つでもそれに対して自己と他者が有する心的表象はときに異なるということへの気づきをもたらすという。Meins, Fernyhough, Wainwright, Gupta, Fradley, & Tuckey (2002) は、生後6ヶ月時の子どもとのやりとりの中で養育者が子どもの心的状態に見合った発話を多く行うことがその後の幼児期の子ども心の理論課題の成績の良さを予測することを報告し、心を気づかう養育者の傾向が子どもの心の理解の発達に促進的な影響を及ぼしている可能性が示唆されている。また篠原 (2011) も、他者の主観的な好みに沿った応答をする3歳児の養育者はそうした応答をしない3歳児の養育者に比して、子どもが6ヶ月時点で測定された、特定の乳児映像に対する心的状態の言及回数が多くな

く少なくともなく、中程度であることを報告している。この結果は、子どもとのやりとりにおいて養育者が子どもに対して過剰でも過少でもない、適度に心的帰属を行うことが子どもの心の理解の発達を促す可能性を示唆しているものと思われる。

以上のように、養育者の感情鏡映や内省機能について検討はされていないものの、心を気遣う傾向の一面である養育者の心的コメントの的確さや多さは子どもの心の理論発達に一部関与しているようである。ただし、心の理論発達に寄与する養育者の行動パターンや心理的傾向は未だ厳密には特定されていない。それゆえ、それらを包括する養育者の特性にも目を向けるべきではないだろうか。実質的には養育者の子どもに対する関わりのパターンを把握してそれと子どもの心の理論発達との関連を具体的に検討していくべきであるが、包括的に養育者の特性との関連性を明らかにするところから、より細かく子どもの心の理論発達に寄与する養育者の実質的な関わりや行動のパターンを特定していく方向性もあってよいのではないだろうか。特に養育者の包括的な特性として、養育者自身の愛着は注目に値するであろう。なぜなら、愛着未解決型²の母親の子どもは愛着安定性が低く相互作用で混乱を示しやすいこと（数井・遠藤・田中・坂上・菅沼, 2000）や、母親の愛着安定性や高い内省機能が子どもの心的状態への的確なコメントの多さを予測しやすいこと（Arnott & Meins, 2007）などが最近示されており、こうした結果は、養育者の特定の愛着スタイルが子どもとの特異な相互作用を通じて結果的に子どもの愛着形成にも心の理解の発達にも影響を及ぼす可能性を暗示しているからである。こうした成果と、養育者との特定の相互作用がある程度子どもの心の理解の発達に関与するとするこれまでの研究結果からすれば、確かに、養育者の愛着スタイル、養育者の特定の関わりおよび相互作用のパターン、子どもの心の理解の発達という一連の因果的経路があらゆる経路の中でどの程度の重みをもつのかを検証することが優先されるべきであろう。しかしまず、本研究で、養育者の愛着スタイルと子どもの心の理解の発達レベルとの関連を検討したい。養育者の愛着スタイルと子どもの心の理解の発達との関連性について、養育者の愛着が不安定型

あるいは未解決型である場合、子どもは養育者の混乱した表出・行動の中から養育者の心を懸命に読み取ることを通して、他者の心の理解について巧みに発達させるということがあるのであろうか。それとも養育者の混乱した反応あるいは無反応ゆえに、子どもも養育者の心を読むことに混乱して、他者の心の理解の発達に遅れや歪みももたらされることになるのであろうか。本研究はそのどちらが仮定されるかというところまで仮説を想定してはいないが、養育者の愛着スタイルと子どもの心の理論発達との関連性について検討を試みる。

方法

調査対象者

4～6歳の保育所・幼稚園に通う子どもとその母親のペア125組を対象とした。対象児の属する保育所は公立の認可保育所1所であり、子どもの定員は60名程度、7時30分から19時まで開所しており、0歳児から入所できる。また、もう1つの、対象児の所属する幼稚園は1園であり、子どもの定員は150名程度、8時30分から14時まで園内で活動が実施され、14時から17時まで預かり保育も行われている。保育所と幼稚園では子どもの活動や保育・教育内容が異なり、保護者の社会経済的地位や状況も異なるため、子どものある発達の特性においても偏りが生じることが懸念される。しかし、本研究はあくまで養育者に内在する愛着スタイルと子どもの心の理論発達との関連性を問うもので、その関連性は社会文脈的要素の影響も含めたものとして把握しようとするものである。確かに、保育所・幼稚園の特徴や保護者の社会経済的地位は子どもの心の理解の発達重要な要件だと思われるが、それらについて今回は度外視することにした。4歳児は総勢41名、男児23名、女児18名、月齢レンジ48～59ヶ月、平均月齢54.9ヶ月であった。5歳児は総勢63名、男児36名、女児27名、月齢レンジ60～71ヶ月、平均月齢65.6ヶ月であった。6歳児は総勢21名、男児10名、女児11名、月齢レンジ72～79ヶ月、平均月齢73.8ヶ月であった。

手続き

子どもに対する心の理論課題実施と保護者に対する質問紙回答要請について事前に保護者に書面

にて説明した。保護者からの快諾を確認できた子どもと保護者のペアについて調査を実施した。心の理論課題は園内の個室で実施した。質問紙は保護者の送り迎えの際に持ち帰っていただき、1週間以内に回答して返却するよう要請した。その結果、回答された質問紙は63名分回収することができ、回答者は全員母親であった。次に、心の理論課題の内容および質問紙の内容について述べる。

心の理論課題

Wellman & Liu (2004) が考案した心の理論5課題を実施した。この5課題は、Wellman & Liu (2004) だけでなく本邦でも東山 (2007) によっておおむねガットマン尺度として構成されることが確かめられている。ただし、多くのサンプルで統計を取って、信頼性の高いガットマンスケール化がなされている、またそれに呼応して適切な問題が配置されている、などの標準化の作業はされていない。課題は(1)主観的欲求、(2)主観的信念、(3)知識アクセス、(4)誤信念、(5)見かけの感情理解で構成され、各課題の内容は以下のとおりである。

(1) 主観的欲求の課題：ニンジンとクッキーを使い、子どもにどちらが好きか尋ね(自己欲求質問)、人形はそれと反対の方を好きだと知らせ、登場人物はどちらを食いたいと思うか問う(ターゲット質問)。ターゲット質問で、子どもの好みのもとは違う食べ物を登場人物は欲していると答えた場合に、この課題を通過したものとみなす。

(2) 主観的信念の課題：テーブルとイスを使い、子どもに猫がテーブルかイスのどちらに隠れているか推測させ(自己信念質問)、人形はそれと反対の方に猫が隠れていると思っていることを伝え、登場人物が猫を見つけるためにどこを探るか問う(ターゲット質問)。またその理由を問う(理由質問)。ターゲット質問で、子どもが考えていたネコの隠れ場所とは異なる場所を登場人物は探そうとすると答えた場合に、この課題を通過したものとみなす。

(3) 知的アクセスの課題：箱を使い、箱の中に犬が入っていることを子どもに見せ、それを見ていない人形は箱の中身を知っているかを問う(ターゲット質問)、またその理由を問う(理由質問)。最後にもう一度、人形は中身を知っている

かを問う(記憶質問)。ターゲット質問で、子どもが人形は箱の中身を知っていないと答えた場合に、この課題を通過したものとみなす。

(4) 誤信念の課題：クッキーの缶を使い、クッキーの箱の中にウサギが入っていることを子どもに見せ、それを見ていなかった登場人物が箱に何が入っているというかを問う(ターゲット質問)、またその理由も問う(理由質問)。最後にもう一度、人形は箱の中身を知っているかを問う(記憶質問)。ターゲット質問で、登場人物は箱にはクッキーが入っていると思っていると答えた場合に、この課題を通過したものとみなす。

(5) 内実と見かけの感情理解の課題：友達に意地悪された登場人物の人形が、自分の本当の気持ちを知られると弱虫と言われてしまうので、本当の気持ちを隠そうとして心と表情を変えていることを子どもに話す。3枚の表情カード(喜び、悲しみ、中性)を使い、登場人物はどんな気持か(感情質問)、どんな表情をしているか(表情質問)を問う。またその理由も問う(理由質問)。感情質問で悲しみを選んだ後に感情質問で中性か喜びを選んだ場合、あるいは感情質問で中性を選んだ後に感情質問で喜びを選んだ場合に、この課題を通過したものとみなす。

単に各課題を通過したか否かを把握するだけでなく、心の理論発達レベルを検討するために、各課題を通過した場合に1点与えるものとして5課題を合計した心の理論得点(0~5点)も算出した。

質問紙

母親の愛着スタイル：ECR-GO日本語版(中尾・加藤, 2004)を引用して作成し、一般他者に対する親密性回避に関する18項目と見捨てられ不安に関する12項目それぞれについて7件法(“1. 全く当てはまらない”~“4. どちらも当てはまらない”~“7. 非常によく当てはまる”)で母親に回答するよう教示した。また、RQ-GO日本語版(中尾・加藤, 2004)を参考にして、4つの愛着スタイル(安定型、回避型、とらわれ型、恐れ型)それぞれの特徴を提示して母親に7件法で自己評定するよう、また最後にその4つの愛着スタイルのうちどれが自分に合うかを強制選択するよう教示した。なお、ここで言う安定型は、人と

いつも心が通じ合う関係をもつことは簡単であり、人に頼ったり頼られたりすることに抵抗がないと感じることが多く、他者と自己自身の双方に信頼をもっていることを特徴とする。回避型は、人ともいつも心が通じ合うような関係がなくても平然とし、自分自身が人に頼っていないこと、自分は何でもできることを重視し、他者への信頼や親密さに欠け、自己信頼・評価に歪みをもつことを特徴とする。とらわれ型は、人と心が完全に通じ合うことを切望している一方で、人が自分自身と親密になりたいと思っていない、自分自身を尊重していないと心配していることを特徴とする。最後の恐れ型は、人と心の通った関係をもつことを望んでいるが、人と親密になることまた人に頼ることを苦手とし、他者および自己自身への信頼が薄いゆえに、人との親密になることで自己自身が傷つくのを懸念することを特徴とする。

親密性の回避に関する18項目の項目平均点を母親の親密性回避の得点、見捨てられ不安に関する12項目の項目平均点を母親の見捨てられ不安の得点とした。また、4つの愛着スタイルそれぞれの回答得点をそのまま、安定型得点、回避型得点、とらわれ型得点、恐れ型得点として使用した。

結果

心の理論発達レベル

Table 1 に示すように、年齢および性別ごとに各課題の通過率を算出した。どの課題においてもおおむね、年齢が上がるに従って通過率が上がっており、性別による通過率の違いはないように思

われる。また、内実と見かけの感情理解以外の4つの課題において、主観的欲求から誤信念にかけて通過率が低下しており、それは課題の困難さを反映しているものと思われる。

課題を通過したか否か（1あるいは0）を従属変数として、課題（5：主観的欲求、主観的信念、知識アクセス、誤信念、内実と見かけの感情理解）×年齢（3：4歳、5歳、6歳）×性別（2：男児、女児）の3要因分散分析を実施した。その結果、課題の主効果（ $F(4, 565) = 13.93, p < .01$ ）と年齢の主効果（ $F(2, 565) = 13.66, p < .01$ ）が有意であり、また課題と年齢の交互作用が有意傾向であった（ $F(8, 565) = 1.75, p < .10$ ）。その他の主効果や交互作用は有意でなかった。したがって、さらに課題と年齢の交互作用における単純主効果を検討した。その結果、どの年齢群においても課題の単純主効果が有意であった（4歳： $F(4, 565) = 7.92, p < .01$ 、5歳： $F(4, 565) = 5.19, p < .01$ 、6歳： $F(4, 565) = 4.33, p < .01$ ）。LSD法による多重比較（ $MSe = .2113$ ）の結果、4歳児では、主観的欲求の課題は他の4つの課題よりも通過率が5%未満水準で有意に高く、内実と見かけの感情理解の課題は誤信念の課題よりも通過率が5%未満水準で有意に高かった。5歳児では、主観的欲求の課題は他の4つの課題に比して通過率が5%未満水準で有意に高かった。6歳児では、主観的欲求の課題は誤信念の課題や内実と見かけの感情理解の課題に比べて通過率が5%未満水準で有意に高く、主観的信念の課題は内実と見かけの感情理解の課題よりも通過

Table1 年齢および性別ごとの各課題の通過率

		主観的欲求	主観的信念	知識アクセス	誤信念	内実と見かけの感情理解
全体	4歳 (N=41)	80.0%	35.0%	37.5%	15.4%	42.1%
	5歳 (N=63)	90.2%	53.2%	58.7%	40.3%	55.6%
	6歳 (N=21)	85.7%	66.7%	81.0%	61.9%	42.9%
男児	4歳 (N=23)	86.4%	27.3%	36.4%	14.3%	45.0%
	5歳 (N=36)	91.2%	51.4%	47.2%	31.4%	61.1%
	6歳 (N=10)	70.0%	60.0%	80.0%	50.0%	50.0%
女児	4歳 (N=18)	72.2%	44.4%	38.9%	16.7%	38.9%
	5歳 (N=27)	88.9%	55.6%	74.1%	51.9%	48.1%
	6歳 (N=11)	100.0%	72.7%	81.8%	72.7%	36.4%

率が5%未満水準で有意に高く、知識アクセスの課題は内実と見かけの感情理解の課題よりも通過率が5%未満水準で有意に高かった。各課題における年齢の単純主効果に関しては、主観的信念、知識アクセス、誤信念の課題それぞれで有意な単純主効果がみられた（主観的信念：F(2,565) = 3.14, p < .05, 知識アクセス：F(2,565) = 8.13, p < .01, 誤信念：F(2,565) = 7.93, p < .01)。LSD法による多重比較 (MSe = .2113) を行ったところ、主観的信念の課題では、6歳児は4歳児よりも通過率が5%未満水準で有意に高かった。知識アクセスの課題では、5歳児と6歳児は4歳児よりも通過率が5%未満水準で有意に高かった。誤信念の課題では、5歳児と6歳児は4歳児よりも通過率が5%未満水準で有意に高かった。4歳児で内実と見かけの感情理解の課題が誤信念の課題よりも通過率が高かったことは予想外の結果であったが、それ以外の結果は期待どおり、主観的欲求から内実と見かけの感情理解にかけて課題が難しくなっていくことを示唆する結果であった。

心の理論発達レベルと母親の愛着との関連性

まず、母親62名から質問紙回答を得ることができ、回収率は49.6%であった。親密性回避および見捨てられ不安、安定型、回避型、とらわれ型、恐れ型それぞれの得点の平均と標準偏差をTable 2に示す。平均値をみると、安定型の得点が4よりも高いことから、多くの母親が自分自身を安定型の要素が高いと評価していることが理解できる。ちなみに、本研究のデータ分析には無関係であるが、4つの愛着スタイルのどれに自分自身が当てはまるかを強制選択で62名の母親が回答した結果は、36名が安定型、2名が回避型、7名がとらわれ型、17名が恐れ型を選択するというものであった。こうした結果からも、母親の半数以上が自分自身を安定型の愛着スタイルを有していると評価している。

続いてTable 2に、心の理論得点と母親の愛着に関わる変数との偏相関係数を示した。先でも見たように、子どもの年齢が上がるとともに課題通過数である心の理論得点も増して年齢との相関関係があることが見込まれるため、その年齢の影響を統制するために年齢を統制変数とする偏相関係数を算出した。その結果、心の理論得点は母親の親密性回避得点、見捨てられ不安得点、愛着とらわれ型得点との間には相関関係を示さなかった。また、心の理論得点は母親の愛着安定型得点との間に弱い正の相関、愛着回避型との間に弱い負の相関を示したが、5%未満で有意ではなかった。しかし、恐れ型得点と心の理論得点との間に5%未満水準で有意な弱い負の相関関係が見られた。つまり、母親が愛着恐れ型であるほどその子どもの心の理論発達レベルは低いという結果が示された。

考察

心の理論発達レベルについて

主観的欲求の理解の課題はどの年齢の子どもにおいても他の残りの4つの課題に比べておおむね容易であることが示唆された。また、6歳児においては、内実と見かけの感情理解の課題は主観的信念や知識アクセスの課題に比べて難度が高いことが示唆された。特に、主観的信念の課題は4歳児よりも6歳児にとって理解可能な課題であることが示唆された。さらに、知識アクセスの課題は4歳児よりも5、6歳児にとって容易な課題であることが示唆された。そして、誤信念の課題も4歳児よりも5、6歳児にとって容易な課題であることが示唆された。まとめると、およそ、主観的欲求、主観的信念、知識アクセス、誤信念、内実と見かけの感情理解の順で難度が高くなり、年齢の高い子どもでなければ理解しにくいことを示唆するものであった。この一連の課題は本来ガット

Table 2 母親の愛着変数の平均と標準偏差、およびそれと心の理論得点との偏相関係数

	親密性回避	見捨てられ不安	安定型	回避型	とらわれ型	恐れ型
平均	3.59	2.71	4.32	2.35	2.63	3.23
SD	.99	.88	1.64	1.31	1.41	1.90
心の理論得点との偏相関	-.09	-.05	.20	-.19	-.10	-.31*

*p < .05

マン尺度として確認されており、このような形で結果が示されるのは当然のものと言えよう。ただ1つ疑問を呈するものとして、4歳児において、内実と見かけの感情理解の課題は誤信念の課題に比して容易であることを示唆する結果が示された。内実と見かけの感情理解の課題で子どもが正答を示す確率は3分の1であるのに対して、残りの4つの課題の正答確率は2分の1であり、内実と見かけの感情理解の課題は偶然であっても正答を得ることは確率的に難しい。また、内実と見かけの感情理解の課題は登場人物についての説明が他の4つの課題に比べて長く、言語理解や注意力が発達途上の4歳児においては難しいはずである。何故、4歳児で内実と見かけの感情理解課題の正答率が高かったのか、今後検討する必要があるだろう。

心の理論発達レベルと母親の愛着との関連性について

心の理論発達レベルに対して子ども自身の年齢が及ぼす影響を統制して、心の理論発達レベルと母親の愛着に関わる変数との偏相関係数を算出したが、母親の親密性回避、見捨てられ不安、愛着安定型、愛着回避型、愛着とらわれ型との間では相関係数の値が小さく有意でなかった。しかし、母親の愛着恐れ型との間では負の弱い相関が有意で、自分自身を愛着恐れ型の側面があると自覚している母親ほど、その子どもの心の理論発達が遅れていることが示唆された。愛着恐れ型の項目は、“私は人と親しくなることに抵抗を感じている。私は人と心が通じ合う関係を持ちたいのだが、

人を信じることにはできない。また人に頼ることが苦手である。人とあまりにも親しくなりすぎると傷ついてしまうのではないかと思う。”というもので、他者に対する愛着に混乱を示しやすい傾向をあらわすものである。愛着に対する母親の混乱の程度は子どもとの相互作用にも反映され、母親を代表とする他者の心に対する子どもの理解にも阻害的な影響を及ぼしている可能性が考えられる。何故、母親の愛着における混乱の傾向が子どもの心の理論発達に対して負の関連を示したのであるか。

しかし、今回の結果だけでは当然ながら、養育者の愛着スタイルから子どもの心の理解の発達への影響経路やメカニズムについて明確に述べることはできない。これまでに見た先行研究からして、Figure 1 に示すように、養育者の包括的特性は心の理解に関する養育者の傾向に参与し、それが子どもとの相互作用のパターンや展開のあり方に作用して、最終的にそれが子どもの愛着形成と同時に子どもの心の理解の発達に影響を及ぼすという影響経路が想定されよう。こうした影響経路に沿って母親の愛着恐れ型の結果について理解するならば、愛着に対する養育者の混乱は内省機能や心を気遣う傾向あるいは感受性を低下させ、そのような養育者は子どもの心的状態に対して的確な感情鏡映が成り立たなかったり共同注意的なりとりが展開しなかったりすることが多く、子どもの心的状態に触れるような心的コメントも少ないということがあったかもしれない。そしてそうした相互作用の下で、子どもは自己自身の心的状態

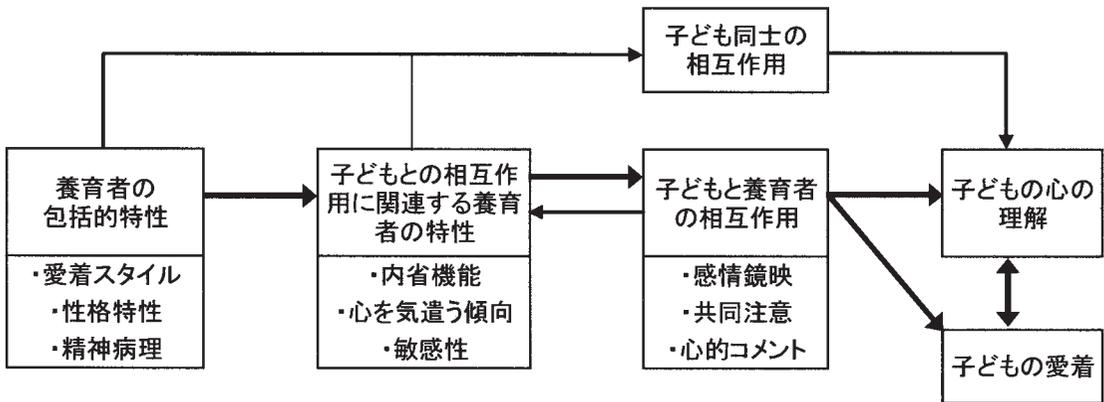


Figure 1 養育者の包括的特性から子どもの心の理解への影響経路

を意識的に覚知することや自己自身と養育者の心的状態のずれを経験することが殆どなく、心的概念について学ぶことも少なかったりして、心の性質について問う心の理論課題に対しても正答を示すことが難しかったということがあられるかもしれない。その他にも Figure 1 に示したように、養育者の包括的特性は養育者同士の関係や相互作用の展開に影響して子ども同士の相互作用が増加したり、養育者が子どもの心的成長を理解して子ども同士の相互作用を促したりして、子ども同士の相互作用から他者の心について学ぶということもあるだろう。こうした影響経路を明らかにするためには、今後、養育者や子どもに関わる諸変数を測定して、因果関係を統計的に検討していかなくてはならない。例えば、先行研究のこれまでの成果を振り返れば、安定型の愛着スタイルをもつ養育者の内省機能は高いのか、また内省機能の高い養育者は子どもの感情に対する随伴的な応答、共同注意的やりとりの連鎖、心的コメントの多さはどの程度なのか、そのようなやりとりの特徴は子どもの心の理解の発達や愛着形成とのどのように関連するのかという疑問は一部分しか分かっておらず、この一連の関連性を特定していくことが必要であろう。また、養育者と子どもを内包する社会文脈的要素、例えば、養育者と子どもが居住する地域の特性、それを反映する幼稚園や保育所の特質、家庭の社会経済的状況なども加味して検討していくことで、養育者と子どもの相互作用や子どもの心の理解の発達におよぼす社会構造の影響についても明らかにすることも必要であろう。

謝 辞

本論文の完成にあたり、学内の先生および愛知教育大学の飯塚一裕先生から貴重なご助言・示唆をいただきました。ここに付してお礼申し上げます。

引用文献

Arnott, B. & Meins, E. (2007). Links between antenatal attachment representations, postnatal mind-mindedness, and infant attachment security: A preliminary study of mothers and fathers. *Bulletin of the Menninger*

- Clinic*, **71**, 132-149.
- Baron-Cohen, S., Leslie, A. M., Frith, U. (1985). Does the autistic child have a 'theory of mind'? *Cognition*, **21**, 37-46.
- Bartholomew, K. (1990). Avoidance of intimacy: An attachment perspective. *Journal of Social and Personal Relationships*, **7**, 147-178.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York: Guilford. pp.46-76.
- 遠藤利彦 (1998). 乳幼児期における親子の心のつながり 丸野俊一・子安増生 (編) 子どもが「こころ」に気づくとき ミネルヴァ書房 pp.1-31.
- Fonagy, P., Gergely, G., Jurist, E.L., Target, M. (2002). *Affect regulation, mentalization and the development of the self*. New York: Other Press.
- Fonagy, P., Redfern, S., & Charman, T. (1997). The relationship between belief-desire reasoning and a projective measure of attachment security (SAT). *British Journal of Developmental Psychology*, **15**, 51-61.
- George, C., Kaplan, N., & Main, M. (1984). *Adult attachment interview protocol*. Unpublished manuscript, Department of Psychology, University of California, Berkley, CA.
- 東山 薫 (2007). “心の理論”の多面性の発達—Wellman & Liu 尺度と誤答の分析— 教育心理学研究, **55**, 359-369.
- Hughes, C., Jaffee, S. R., Happé, F., Taylor, A., Caspi, A., & Moffitt, T. E. (2005). Origins of individual differences in theory of mind: From nature to nurture? *Child Development*, **76**, 356-370.
- 数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹 (2000). 日本人母子における愛着の世代間伝達 教育心理学研究, **48**, 323-332.
- Main, M., & Goldwyn, R. (1984). *Adult attachment scoring and classification system*. Unpublished manuscript, University of California, Berkley, CA.
- Meins, E. (1997). *Security of attachment and the social development of cognition*. East Sussex: Psychology Press.
- Meins, E., Fernyhough, C., Russell, J., & Clark-

- Carter, D. (1998). Security of attachment as a predictor of symbolic and mentalising abilities: A longitudinal study. *Social Development, 7*, 1-24.
- Meins, E., Fernyhough, C., Wainwright, R., Das Gupta, M., Fradley, E., & Tuckey, M. (2002). Maternal mind-mindedness and attachment security as predictors of theory of mind understanding. *Child Development, 73*, 1715-1726.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, *5*, 19-27.
- Ontai, L. L., & Thompson, R. A. (2002). Patterns of attachment and maternal discourse effects on children's emotion understanding from 3 to 5 years of age. *Social Development, 12*, 657-675.
- Repacholi, B. M., & Gopnik, A. (1997). Early reasoning about desires: Evidence from 14- and 18-month-olds. *Developmental Psychology, 33*, 12-21.
- 篠原郁子 (2011). 母親の mind-mindedness と子どもの信念・感情理解の発達：生後5年間の縦断調査 発達心理学研究, *22*, 240-250.
- Symons, D. K., & Clark, S. E. (2000). A longitudinal study of mother-child relationships and theory of mind in the preschool period. *Social Development, 9*, 3-23.
- Wellman, H. M., & Liu, D. (2004). Scaling of theory-of-mind tasks. *Child Development, 75*, 523-541.
- Wimmer, H., & Perner, J. (1983). Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition, 13*, 103-128.

脚 注

- 1 子どもの愛着の個人差は、養育者との分離および再会の際の行動パターンから把握することができる。愛着安定型の子どもは、養育者との分離時に多少の泣きや混乱を示すものの、再会時には積極的に身体接触を求めて泣きや混乱は容易に静穏化しやすい。また、養育者を安全基地として積極的に探索行動を行うことができる。一方、愛着不安定型に位置づけられる回避型の子どもは、分離時に泣きや混乱を示すことも再会して積極的に養育者に近

づくこともあまりなく、養育者を安全基地として探索行動を行うことがあまりない。また不安定型のうち、抵抗型の子どもは反対に、分離時に非常に強い混乱や泣きを示し、再会すると身体接触を強く求めながら怒りや攻撃を示すという両価的な行動を表しやすい。それゆえ、親を安全基地として安心して探索行動を行うことがあまりできない。安定型はもちろん、回避型の子どもは養育者に対する愛着行動や情動表出を一貫して抑え込むことによって、抵抗型の子どもは愛着行動や情動表出を最大限に表出することによって、養育者との関係を繋ぎとめておこうとする点で、いずれも適応的かつ秩序だった愛着パターンといえる。しかし、安定型、回避型、抵抗型のどれにも位置づけられない無秩序型の子どもは、分離や再会時に養育者への接近と回避という両立しにくい行動を示しやすく、不自然でぎこちない素振りやうつろな表情を示すこともあり、傍から見て何をしたいのかが読み取りづらい行動パターンを示しやすい。養育者との関係を繋ぎとめようとするという点からすると、その行動は無秩序で、組織化されておらず非適応的だといえる。愛着研究者の多くは子どもの安定型愛着の形成において養育者の感受性の働きを考えているが、特に Fonagy et al. (2002) は、感受性の高い養育者は子どもを意図ある主体として捉え、時々刻々と変化する子どもの心的状態を読み取ることができ、それは子どもの心の理解の発達をも推し進めると考えている。具体的には、安定型の子どもは安心して養育者の行動からその心的状態を読み取ることができるが、回避型の子どもは養育者の心的状態を遠ざけようとするために、抵抗型の子どもは養育者との親密な心的交流が成り立たないほどに自分自身の苦痛に焦点が向いてしまうために、養育者の心的状態を読み取ることがある程度困難であろうとしている。すなわち、子どもが養育者の心を読み取る際に、養育者の感受性や心的状態の中にどれだけ心的状態をもつものとして自己像を見出し、その自己像と結びつけた形で養育者の心的状態を読み取るかということが、子どもの心の理解の発達を左右するということである。しかしそうした点で、子どもに怯えまた怯えさせる養育者をもつ無秩序型の子どもは他の愛着タイプの子どもの一線を画すという。無秩序型の子どもは、養育者の行動を予測して自分自身の安心を確保するために養育者の心的状態に極めて敏感

であるため、他者の心的状態を読み取るスキルを獲得していくが、それは自己像と結びつけて他者の心的状態を読み取るようなものではないという。別の言い方をすれば、他者の心的状態の読み取りにおいて、心の理論の理論 (theory-theory of mind) と自分自身の経験から他者の心的状態を理解するシミュレーション (simulation) の双方を発達させるのが愛着安定型の子どもであるのに対して、無秩序型の子どもは心の理論の理論のみを発達させ、シミュレーションを発達させないということである。

- 2 養育者や青年期の愛着を対象とした研究においては、成人愛着インタビュー (adult attachment interview) (George, Kaplan, & Main, 1984; Main & Goldwyn, 1984) から成人の愛着個人差を測定する潮流と、質問紙から個人差を測定する流れ (Bartholomew, 1990; Brennan, Clark, & Shaver, 1998) がある。成人愛着インタビューは、養育者との関係について子ども時代のことを想起して語ってもらうことで、語りの内容だけでなく語り方や語りの構造から安定自律型、愛着軽視型、とらわれ型、未解決型のいずれかの愛着タイプを特定するものである。例えば、安定自律型の個人は、過去の愛着関係が自分の人生や現在のパーソナリティに対して持つ意味を深く理解しており、自分の過去の愛着関係の歴

史を肯定的な面と否定的な面の双方について整合一貫した形で語ることができ、他者や自己自身を深く信頼しているゆえに対人関係は全般的に安定している。一方、愛着軽視型の個人は養育者との具体的な相互作用やエピソードについて語る事がなく、養育者や他者との親密な関係を避けようとしていることがうかがえ、また、とらわれ型の個人は愛着関係の歴史について矛盾を含みながらまた養育者が自分に対してとった態度にこだわりを示しながら語る事が多く、他者との親密な関係を切望する一方で、見捨てられ不安を抱いていて、対人関係は全般的に不安定になりがちである。そして、未解決型の個人は、過去に養育者の喪失やトラウマ体験を有しており、それに対して葛藤した感情を抱いていて、語りの最中に非現実的な内容が入り交じることがある。理論的には、各タイプは順に、乳児期における安定型、回避型、抵抗型、無秩序型に相当するものとされる。質問紙法においても成人愛着の個人差として順に、安定型、拒絶回避型、とらわれ型、対人恐怖回避型を把握することができるが、成人愛着インタビューとは異にして質問紙法は相対的に、個人が意識的に想起することができる関係性を把握するところが大きい。

(2011.11.30 受稿, 2012. 3. 6 受理)

The relationship between the development of theory of mind and parental attachment

Takahiro Hisazaki

This study examined the relationship between preschooler's developmental level of theory of mind and their mothers' attachment style. Four to six year old children tried to address a series of theory of mind tasks that had been exploited by Wellman & Liu (2004) and their mother reported her own attachment style by questionnaire. Results showed that children whose mothers had more fearful avoidant attachment style could pass fewer theory of mind tasks, suggesting that a specific interaction pattern between children and their parents who have more fearful avoidant style has a detrimental effect on their development of understanding others' minds. There is a necessity to demonstrate a developmental path in which parents' attachment style affects their children's mentalizing ability through interaction between parents and their children.

Key words: theory of mind, preschool period, attachment style, relationship between parents and their children